

「新人類」はどのように生まれるか？

吉本, 圭一
雇用職業総合研究所

<https://hdl.handle.net/2324/18526>

出版情報 : エンプロイ : 都内版. 4 (5), pp.4-5, 1987-05-01. 雇用情報センター
バージョン :
権利関係 :

「新人類」はどのように生まれるか？

雇用職業総合研究所
職業情報研究部第二研究室

吉本圭一

「新人類」の2つの評価

職業への取組みや職場定着などの問題に関していえば、最近の若者＝「新人類」という評価は今や全く自明の前提として使われている。この言葉が使われ始めた頃は、そこにはもっぱら否定的な評価が込められていた。「青い鳥」、「ピーターパン」などの名前と同じく、今いる職場に積極的なアイデンティティをもたず、究極の適職を求めて、ちょっと嫌になると職を転々とし、なかなか一人前の職業人にならないといった「〇〇症候群」のひとつに数え上げられていた。

それが最近では、多方面にわたる発想や趣味、人間ネットワークをいかして、新たな消費ニーズを見つけ、新たな製品の開発ができるといった肯定的な評価が圧倒的である。

さて、この評価の変化は何を意味しているのだろうか。同じ「新人類」が、かつては企業のお荷物であったけれど、何とか役に立とうと改心したのだろうか。そうではあるまい。世代の違いがあるとは考えにくい。それぞれは、同じ若者についての評価の表裏であり、その評価する側面が大きく転換したのであろう。

それならば、次の疑問は、評価が短時日のうちに一転するような「新人類」というのがどこでどのように形成されているのか、また「新人類」が「旧人類」とどれほど異なった実態にあるのだろうか、ということになる。

そこで、こうした「新人類」検証のため、今月号では、就職以前の高校生を対象とした調査結果をも

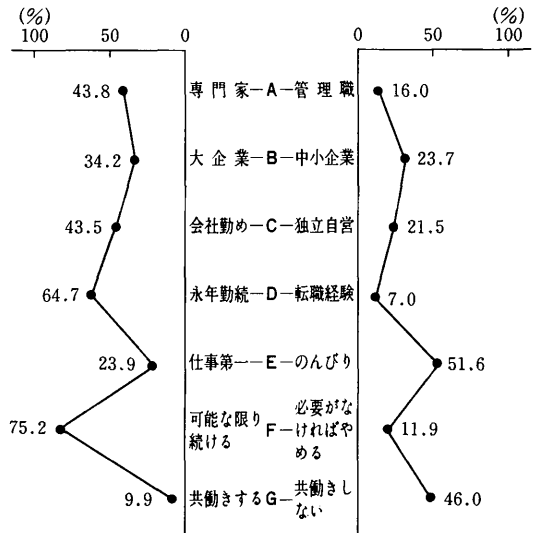
とにして、職業キャリアの希望の形成の状況を明らかにしよう（以下では男子の結果のみ）。（注1）

高校生の就業キャリア希望

高校生調査の結果によると、7つの対照的な職業生活の組合せに対して図1に示すような回答が得られた。ここから高校生が望む就業キャリアの多数パターンを描いてみると、く大企業にはいり、転職を経験せずにひとつの会社でずっとサラリーマン生活を送る；仕事の面では、専門能力を身につけて、ゆとりをもってのんびりとやっていきたい、仕事はできるだけ長く続けたいが、共働きはしたくない」というのが公約数である。

モーレツ社員はまっぴららしいが、さりとて「新人類」というほど年長者たちの世代と異なる職業観をもっているわけではない。むしろ親たちが歩んだ

図1 高校生のキャリア観



ような旧来的な職業キャリアを望んでいる高校生が多数を占めている。

もちろん、若者世代のなかに少数の「新人類」と多数の「旧人類」という異質な者が混在しているとも考えられる。ところが、先にあげた就業キャリアの希望やその希望職種についての回答パターン分類をしてみると、「新人類」と呼べるようなパターンは基本的なものとしては出てこない。つまり、高校生の職業観は、「大企業ホワイトカラー志向」「自営独立志向」「希望未形成」の3つの類型に基本的に分かれている。

なお、一般的ではないけれども、この3類型をさらに細分してみると、「新人類」か否かを仕分ける軸が出てきた。「必要がなければ仕事をやめ」「いくつかの会社に勤務し」「のんびり仕事をする」とか「希望職種未定」などが一方にならび、逆方向には「仕事第一」で専門技術職やサービス職などの職種希望がならぶ。この軸は、単にさまざまな志向が未形成であるかどうかというわけではない。職業希望が決まらないのではなく、職業に積極的にかかわりたくないという明確な反応が一方に集中しているのである。(注2)

ともあれ基本的に、高校生は「新人類」などと話題になるほど大人たちの職業観と異なっているわけではない。

職業希望形成と「旧人類」

今「新人類」の特色といわれるのは、リースマン・

D.がかつて「他者志向」と呼んだものに近い。つまり、多方面の情報についてアンテナを張りめぐらして収集し、年長世代よりも同世代に影響されて意思決定するというのであるが、高校生の職業情報収集・希望決定などではどうだろうか。

調査結果でみるかぎり、高校生はまだ「新人類」とはいえない。まず、職業の情報をどこから入手するかという点で、家族の影響が最も大きく、それ以外にも学校の指導など年長世代の影響が、友人など同世代の影響を上回っている。

「旧人類」のはずの保護者の意見を高校生たちが頼りにしているということは、職業希望形成の状況からもわかる。つまり、図2に示すように、保護者が何か職業について具体的な希望をもっている場合、4分の3の生徒が自分自身の希望を決めている。ところが、保護者の希望が特でないとか、希望が子どもにはっきりと伝わっていない場合は、子ども自身希望職業を決められないでいる者が半数にのぼっている。

結局、きざしはあるけれども、高校生の段階では「新人類」は生まれていない。いったい「新人類」とは何か、次号では若年労働者の就業実態の面から考えてみよう。(つづく)

注1) 雇用職業総合研究所「高校生の職業希望に関する調査研究報告書(中間報告)」(1986)。

2) 吉本圭一「高校生の就業希望と家族の影響」『雇用と職業』56号(1986)。

図2 保護者の職業についての考え別にみた生徒の職業希望決定状況

